

— 報 文 —

幼稚園における絵本の読み語りに関する研究(2)

— 子どもの発達からみた絵本選びの観点 —

長瀬 莊一 幸本 由紀子* 富本 佳郎**

A Study on Reading Picture Books to Young Children in Kindergartens (II): A Point of View on the Selection of Picture Books in the Development of Young Children

Soichi NAGASE, Yukiko KOMOTO and Yoshiro TOMIMOTO

要 旨

絵本に関する指導を計画的に行うために必要な課題の一つに、どんな絵本を選ぶかという問題がある。本研究では絵本を選ぶ際に、これまでどんな基準が考えられてきたのかを分析し、専門家の考えと子どもの興味との間に違いがあることを見出した。また、絵本選びに影響する要因として絵本を構成する要素、発達目標、子どもの個人差などについて検討した。さらに実際的な問題として、絵本に関する情報入手の方法、幼稚園における指導の留意点について考察した。

キーワード：絵本 picture book, 幼稚園 kindergarten,
絵本の読み語り reading picture book, 絵本選び selection of picture books,
子どもの発達 development of young children, 個人差 individual difference

1. 絵本選びに関する問題

幼稚園における絵本に関する指導を計画的に行っていくために必要な主要課題の一つとして、どんな絵本を子どもたちに読み語ったらよいかという問題がある。今日、多くの絵本が出版されているが、その中から子どもの発達にとって望ましい絵本を選ぶことはそれほど容易なことではない。それはあまりにも絵本の数が多くて、その中から適切なものを選ぶのが困難だということばかりでなく、選ぶ際に何を基準にしたらよいか、というもっと根本的な問題があるからである。

子どもに読み語る絵本を選ぶには、一般に幼稚園では教師が行い、家庭においては保護者が自分の判断で行うか、あるいは子どもの興味を考えて行うことが多い。その場合、教師や保護者はどんな基準で選んでいるのだろうか。自分自身が幼児期に読んでもらった経験を思い出し

* 兵庫県豊岡市立豊岡めぐみ幼稚園教諭

** 神戸女子大学名誉教授

て、強く印象に残っている絵本の中から選ぶこともできるが、その後には出版された数多くの絵本のことを考えると、そうした判断だけに頼るわけにはいかないことは明らかである。

そこで、図書館や書店へ行って、実際に絵本を手に取りながら、これから子どもに読み語るのに適当な絵本を探したりすることになる。その際、関係職員に相談して意見を聞くということもある。また、あらかじめ絵本についての何らかの情報を持って、絵本を探すこともあるかもしれない。しかし、いずれにしてもどんな点を考慮して絵本を選んだらよいかという具体的な選択の基準が求められることになる。

本研究では、まずはじめに筆者らがこれまでに行った研究の結果から、絵本に関する専門家、幼稚園教師、保護者、子ども自身のそれぞれが選んだ絵本の特徴を比較しながら、そこではどんなことが基準として考えられているか、について分析を行った。次いで、このことをもとに絵本を選ぶ際の基本的な観点として、絵本のどんな面に注目したらいいのか、絵本選びに影響すると考えられる絵本を読み語る目的の違いや子どもの発達段階その他の違いなどの要因、および実際に絵本を読み語る際の問題点について考察した。そして最後に、絵本選びの実際の問題として、絵本についての情報入手に関する方法と、とくに幼稚園における絵本を選ぶ際の留意点についてまとめた。

2. 選ばれた絵本の特徴と問題点

子どもの発達にとって望ましい絵本というのは、誰にも共通して考えられる特徴を持っているものなのか、それとも人によって選ぶ絵本の特徴には違いが見られるものなのか、はじめにこのことを検討するために、絵本に関する専門家、幼稚園教師、保護者、子ども自身がそれぞれ選んだ絵本の特徴をあげて比較・考察を行った。

(1) 専門家が選んだ絵本

ここでは絵本についての研究者のうちから、代表として次の6人の意見を取り上げた。

まず、日本の児童文学研究者たちに大きな影響を与えたとされているカナダのリリアン・H・スミス(1953)は絵本のあるべき姿として「・・・その発想は新鮮で、独自の空想に富んでいる。どの本の中にも、しっかりしたテーマがある。テーマはアクションによって展開されて、単純化された形であるとはいえ、よいストーリーがかならずもっているべき条件をみている。つまり、はじめがあり、中間があり、終わりがあるという、はっきりしたプロットをもつ。どの本も、ひとりの主人公について語られ、その主人公は、・・・読者である子どもが自分と同一視できる者である。題材は空想的なもの——そして、時には、途方もないものである場合でも、子どもの身近なものとの関連がなければならない。・・・しかしまた、こうした関連のある一方、主人公の境遇と、絵を見、話を聞く子どもの境遇とのあいだには、ちがいもあって、そのちがいにより、子どもは、自分のせまい環境がひろげられ、新しい視野がひらけたという実感をもつ。」と述べている¹⁾。

松居 直（1973）は絵本を論ずるにあたって最低これだけは読んでほしいという絵本のリストを示しながら、「絵本の良し悪しはその絵本の中に、どれほど豊かな言葉、中身のある言葉、存在感のある言葉、読み手や聞き手が心から共感できる言葉があるかによって決まります。そしてそういう言葉はまた、豊かで確かなイメージを形作ってくれます。」と述べて²⁾、絵の働きとともに、言葉の力について強調している。

渡辺茂男（1978）は良い絵本が備えている条件として、次の5つの観点を示している。すなわち、①一つの意図が一冊にゆきわたったものである、②芸術的にすぐれた絵である、③すぐれたことば—文章—物語で描かれている、④絵と文章が一致したものである、⑤発達段階に適したものである。さらに、良い絵本をその特徴から、遊びの豊かなもの、空想豊かなもの、芸術性豊かなもの、物語性豊かなもの、感情情緒豊かなもの、科学性豊かなもの、社会性豊かなもの、に分類している³⁾。

瀬田貞二（1985）は良い絵本の条件として、①はっきりしたテーマを持っている、②小さい子のわかる、親しい主人公がでてくる、③りっぱな絵で挿絵してある、という3つをあげている⁴⁾。

松岡享子（1987）はとくに絵本における絵の役割に注目して、良い絵本の条件として、①絵本の絵は、それによってものが考えられるようなものでなければいけないこと、②絵本の絵は、細部に至るまで、正確でなければいけないこと、③絵本は、子どもたちに美的満足を与え、より質のよい美しさの世界へ子どもをひき上げてくれるものでなければいけないこと、という3つのことを示している⁵⁾。

中村 征子（1997）は保育の実践における絵本の読み語りを通して、良い絵本の基準をあげている。まず、その年齢の子どもに十分にわかるもので、面白いものであること、次に、身近な事柄から少しずつ世界を広げてくれるような内容であること、そして、物語の世界を伝えるのにふさわしい絵や、選びぬかれた言葉であること、などとまとめている⁶⁾。

以上のように、ここで引用した個々の研究者の意見にはそれぞれニュアンスの異なる表現が見られるが、ここにあげた以外の記述も参考にしてみると、良い絵本についての共通した見方としては、はっきりしたテーマにそって、選びぬかれた言葉と芸術的にすぐれた絵を持っていて、しかもそれが子どもたちに親しみを感じさせ、子どもの心を広げてくれるものだという考えがうかがえる。また、これに加えて、子どもたちに繰り返し、長く読み継がれているという特徴も良い絵本の条件の一つとして指摘されている。

（2）幼稚園教師が選んだ絵本

これについて筆者ら（2003b）が幼稚園教師を対象に行った調査では⁷⁾、「読み終わった時、子どもの反応の良かった絵本」についての回答結果として、子どもたちがあまり絵本の種類にとらわれないで、広く興味を示していることが見出されている。年齢別の特徴をみると、3歳児では繰り返しの多い内容の絵本を、4歳児では身近なテーマを描いた絵本を、5歳児では冒

険的な内容の絵本を好む傾向のあることが指摘されている。

また、教師は絵本選びにはかなり気を使っている様子がかがわれ、できるだけ子どもが好むものを取り上げて、繰り返し読んだり、子どもからリクエストのあるものにも積極的に応えている。そのほか、子どもが主人公に投影しやすいものや、ふだんの遊びから子どもの関心に合っているものなど、教師自身の好みに偏らないような配慮をしていることがわかった。

(3) 保護者が選んだ絵本

筆者ら（2003c）が幼稚園児の保護者を対象に行った調査結果によると⁸⁾、「どんな絵本を選んで読み語っているか」という問いに対しては、「子どもの興味・関心に合った絵本」という回答がどの年齢段階でも多いが、それとともに3、4歳児では「内容が理解しやすい絵本」という回答が多かった。また、4、5歳児では「ユーモアで面白い話の絵本」や「自分で読める絵本」という回答も比較的多かった。このほか、「知的好奇心を持たせる絵本」をあげた回答が他に比べて5歳児に多い傾向が見られた。

また、「読み語った時に、子どもの反応が良かった絵本」についての回答からは、どの年齢段階においても、長年にわたって子どもたちに親しまれてきた絵本が多かった。このほか3歳児では「単純で、理解が容易な絵本」、「子どもの生活に密着していて、登場人物に共感しやすい絵本」、4歳児では「ストーリーのある絵本」、「空想性が豊かな絵本」が好まれ、5歳児は3、4歳児に比べて好む絵本の種類も多く、ユーモアに富む絵本を好む傾向が見られた。

(4) 子どもが選んだ絵本

筆者ら（2003a）が幼稚園4歳児に行った調査および観察の結果によると⁹⁾、子どもが「面白い」と強く感ずる絵本に共通する特徴としては、文の内容については空想性、ユーモア、意外性、冒険的要素に富んでいること、絵の表現については鮮やかさと躍動性があること、があげられる。これに比べて、「面白さ」の程度が比較的低かった絵本に共通する特徴は、絵の色が少なく暗いこと、線が細いこと、変化が少ないこと、文は穏やかだが活気に乏しいこと、があげられる。

ここでとくに注目したいことは、研究者の多くが上位に推薦している絵本の中で、子どもたちにはあまり面白く感じられない絵本があったことである。これらの絵本は一般に穏やかな雰囲気の中で静かにストーリーが展開していく、心にしみとおるような物語とされているのである。しかし、これは子どもたちから見ると、上に述べた「意外性」や「躍動性」のような要素が欠けているためではないかと考えられる。そうした絵本に対する興味はもっと年齢段階が進んでからでないと強くないのかもしれないし、あるいは変動の激しさを増している現代社会に生活する子どもたちのテンポには合わなくなっているのかもしれないと考えられる。

3. 絵本選びの基本的な考え方

ここまで、絵本に関する専門家、幼稚園教師、保護者が、どんな絵本を子どもにとって好ましいと考えているか、また、子ども自身がどんな絵本を好んでいるかについて、その主な傾向をみてきた。それによると、「想像性が豊か」のように誰からも共通に好ましいとみられている絵本の特徴もあるが、同時に専門家と子どもの好みに違いがあるように、それぞれの立場の違いが絵本選びに影響することも予想される。

また、子どもの発達を考えて、どんな絵本を読み語ったらいいのかを考える場合、そのための絵本選びの基準として、どんな場合にも共通する特定の絶対的な基準を求めることはおそらく困難であるし、またその必要もないように考えられる。少なくとも、どんな機会に、何のために絵本を読み語るのか、その目的によっても、そこで選ばれる絵本は違ってくると考えられるからである。したがって、ここではどんな場合にも通用するような絵本選びのための絶対的な基準を探るのではなく、絵本選びの個々の場面で、いつも考慮しておきたい観点到焦点を当てて考察することのほうがより重要であると考えた。

(1) 絵本の内容を構成する要素

絵本の内容を構成している主な要素は「絵」と「文」である（‘文字なし絵本’については別に後述）。そこで、はじめに絵と文のそれぞれについて、好ましい特徴として、これまでにどんな期待が寄せられてきたのかをみると、およそ次のとおりである。

絵の特徴：美しい（芸術的）、想像力をかきたてる、優しい、シンプル、物語る絵、よく見
ることを促す、多様な見方・考え方を促す、いろいろな動きがある、など

文の特徴：リズムカナルな言葉、ユーモアがある、平明・簡潔な表現、繰り返しがあ
る、テーマがある、ストーリーがいい、満足できる結末、生活の身近な話、冒険的な話、
など

ここで、絵の特徴としてあげられている「物語る絵」という表現には特別な意味がこめられている。これについて伊藤朋子（1977）は「・・・その中で大きく変わったといえるのが、絵本の絵のもつ役割ではないだろうか。・・・それは、かつての絵本の絵が、物語り或いは言葉の挿絵的役割しかなかったのに対して、現在の絵本の絵は、絵それじたいに物語を語る力があるということである。」と述べ、そうした絵の特質として「入っていける絵」（絵本の絵の中に自ら入ってゆき、その物語の主人公と一緒に冒険をし、いたづらをし、泣いたり、笑ったりできる）、「連続性のある絵」、「動きのある絵」の3つをあげている¹⁰⁾。

こうした絵と文のそれぞれへの期待とは別に、絵と文の関係について、それらがうまく調和していることを期待する意見もある。これについてリリアン・H・スミス（1953）は「・・・絵本が永続的な喜びを与えるためには、挿絵と文とに、同等の力がなければならないということが、よくわかる。」と述べている¹¹⁾。

また、‘文字なし絵本’のように「絵だけでストーリーやテーマが展開し、場面中にまった

く文字でことばが書かれていない」もので¹²⁾、絵本としてすぐれた評価を得ているものがある。そこには、絵そのものにも言葉があり、その言葉を読むという考え方がある。そして、その利点としては「作者の意図から離れても、絵本は自由な読みが許容されるものであることを受け入れる時代にあって、文字のない絵本は文字で内容が限定されない分、一人の愉しみをよりひろげることが可能であり、また文字が喚起する音すら誰とも共有することがないため、読者はより個人的な世界を堪能できることになる。」ということがあげられている¹³⁾。また、ここでは「読み語る」ということの代わりに、そこに描かれている絵を媒介にして親子の「対話」（親子に限らないが）が行われることになり、両者による楽しみの共有がより明らかになると考えられる。

このほかに、こうした絵本を構成する要素についてではなく、絵本から受ける全体的印象として、好奇心をかきたてる、主人公と一体化できる、日々の暮らしの幸せが感じられる、楽しめる、発達段階に合っている、などが選ぶ基準になっていることがある。また、昔から読み継がれているもの、自分が子どもの頃に読んだもの、などもよく基準になっている。

(2) 発達目標に関する要因

①絵本を読み語る意義の捉え方

絵本を読み語る時に、子どもの人格のどの側面の発達を重視しているかによって、選ぶ絵本は違ってくる可能性がある。しかし、どの絵本もそれほどはっきりと特定の人格的側面の発達に焦点を合わせているわけではないから、たとえ、人格のある側面の発達を意識して絵本を選ぶとしても、そう簡単にはいかない。後述する絵本の種類についてみても、科学・知識に関する絵本の場合には、人格の知的側面と比較的はっきりと結びつけることができるが、そのほかの絵本の場合には、人格のもっと広い側面を包括しているように考えられる。

これについて、専門家の多くに共通している考えは、子どもたちが絵本に接することによって想像力を豊かに発達させていくことである。子どもたちは絵や言葉から想像力を働かせて物語を楽しんだり、理解したりしていると考えられている。また、このほかに美的感覚のような情動的な側面の発達や、知的好奇心を促すことなどを絵本に期待しているようにみえる。

なお、一般に絵本によって語彙（い）や表現力のような言葉の発達についても好ましい影響のあることが示唆されているが、これについては絵本を読み語る際に、はじめから文字や知識の獲得を目標にすることは批判的な意見が多い。それは、そのことによって絵本を楽しむことが妨げられるおそれがあると考えられているからである。

このことに関して、子どもたち自身がいろいろな絵本に接して、どんな楽しみ方をしているかについて行った筆者ら（2003a）の調査の結果からは¹⁴⁾、子どもたちが人格発達の全面にわたって、すなわち知的側面に関して、感情的側面、意欲的側面、社会的側面に関してもその楽しみを見出していることが示唆されている。絵本選びにあたっては、子どもの興味・関心を軽視することはできないから、とくに目的を絞った場合でなければ、一般には子どもの人格発

達の比較的広い側面を含んだものを取り上げるのが適当ではないかと考えられる。

②絵本の読み語りの効果への期待

子どもの人格発達にとって絵本の読み語りが期待される効果については、すでに①において絵本を読み語ることの意義に関してふれているが、これについてももう少し詳しくみておきたい。

絵本が与える子どもの人格発達への効果としては、これまでに専門家から次のようなことがあげられてきた。

- ・空想性を豊かにする
- ・感受性を強める
- ・ユーモアの感覚を育てる
- ・判断力・思考力を高める
- ・注意の集中力を高める
- ・表現力を豊かにする
- ・言葉を豊かにする
- ・ストレスを発散する（感情の安定化）

また、とくに行動面への効果としては、絵本によって間接体験を増やすことができること、絵本の内容が子どもたちの日常の遊びに発展して、生活を豊かにしてくれること、などが指摘されている。

さらに、絵本の読み語りが人間関係の持ち方に与える影響を重視する声もある。それが読み手と聞き手の心の交流を深める機会になると考えられるからである。これは多くの場合、「親子の絆」を強める効果と言われているが、もっと一般的には大人と子どもが信頼関係を強めていく効果とすることができる。このことは家庭における親子の絆の弱さが指摘され、社会全体における人間関係の希薄化が問題にされている今日において、あらためて考えてみる必要のあることではないだろうか。

(3) 子どもの個人差に関する要因

ここでは絵本を選ぶにあたって、子どもの発達段階の違いとしての年齢差、男の子と女の子の違いである性差、一人ひとりの子どもの違いである個人差をどのように配慮したらよいのか、について考えてみたい。

まず、絵本の対象となる子どもの年齢についてであるが、これは一般にあまり厳密に受け取らなくてもいいのではないかと考えられている。確かに、絵本によっては「何歳ぐらいから何歳ぐらい」と明示してあるものもあるが、その範囲を超えても差し支えないと言われている。それは、その範囲以外の子どもが読んでもらった場合でも、その子なりに絵本の内容を受けとめればよいという考え方が多くなってきているからである。そこでは絵本は作者の意図から離れて、独自の楽しみ方をしても許されると考えられている。

しかし、絵本の内容がよく理解できなければ、その楽しみは周知的、部分的なものにとどまってしまうから、作者が本来意図している内容を理解できる平均的な年齢を示して、「何歳以上」としている絵本もある。このことについて大橋和子（1977）は子どもに好まれる絵本が幼稚園における異なる年度の同年齢の子どもたちで同じ傾向を示していることを明らかにし、そのことから年齢相応の絵本の必要性があることを示唆している¹⁵⁾。

性差については、筆者ら（2003a）が行った調査結果では¹⁶⁾、3歳～5歳の年齢段階では一

般に女の子のほうが男の子よりも絵本に対する興味・関心が強いという傾向が見られた。しかし、絵本の種類によっては逆になることもあった。たとえば、乗物絵本については、むしろ男の子のほうが女の子よりも強い興味を示す者が多かった。また、一般に男の子のほうが女の子に比べて、絵本の種類による好き嫌いが強いという傾向を示していた。

こうした子どもについての一般的な傾向は、絵本を選ぶ時の一つの参考になるが、同時に個人差の存在も忘れてはならない。上に述べた筆者らの調査からも、同一の絵本に対して「とてもおもしろかった」という肯定的な反応から「つまらなかった」という否定的な反応まで、多様な反応のあることがわかった。それと同時に、子どもたちの中には種類の違ったどの絵本に対しても強い興味を持っている者、それとは反対にどの絵本に対してもあまり興味を示さない者、あるいは絵本の違いによって興味が大きく変わる者、などのタイプの違いがあることもわかった。

したがって、単に絵本に対する子どもの好みの一般的傾向によって絵本選びを行うことは適当であるとは言えない。そこでは個人的な要因を考慮する必要がある。なんといっても、子どもがその絵本に興味を示してくれなくては意味がないからである。しかしまた、子どもの言いなりに絵本を選ぶというのにも問題がある。いずれにしても、子どもの興味がどのように取り上げたらよいか、が一つの重要な検討課題になる。

このことに関して、三宅興子ら（1997）の指摘していることはたいへん興味深い。これは1975年から1985年に行われた調査であるが、この中で日本の伝承物語絵本が大人には支持されているのに子どもたちがあまり関心を示さないのは、その伝承物語のなかの日常場面が現代の子どもたちの日常生活とあまりにかけ離れているためではないかと指摘している¹⁷⁾。ここでは時代の変化、それに伴う生活の変化という要因が絵本選びにも影響してくることが示唆されている。

(4) 読み語りの実践に関する要因

はじめて絵本を読み語る場合には、どんな種類の絵本からはじめたらよいかを考えるであろうし、はじめてでない場合にはそれまでにどんな絵本を読んだことがあるかを振り返って考えるであろう。ここではまず、子どもの絵本経験が絵本選びに影響する面について考えてみたい。

1992年にイギリスで始まった「ブックスタート」運動は、日本でも2000年の‘子ども読書年’を契機に各地に広がってきている。これは0歳児から保健所での健診の機会に絵本を親に手渡して、親子で本を読む楽しみを共有しながら親子の絆を深めてもらおうという試みで、はじめて子どもに絵本を読み語る良いきっかけになり、ここでは適切な絵本も紹介されている。最近こうした赤ちゃん向けの絵本がたくさん出版されている。

これに対して、すでにある年齢を経過した子どもの場合には、それまでにどんな絵本に接したことがあるか、その経験が絵本選びに関係してくる。これはそれまでに読んだことがない新しい絵本を選ぶのが適当だということを直ちに意味しているわけではない。幼児期にある子ども

もたちは以前に読んでもらったことのある絵本のうちで、自分が気に入った絵本を何度も読んでほしいと言ってくることも珍しくないし、また、そういう絵本への接し方を否定する必要もない。読むたびに新しい発見や、新しい発想が生まれてきたりするからである。

しかし、一冊の絵本には刺激としての限界もあるから、子どもの人格の広い側面への働きかけを考えれば、いろいろな絵本を読み語ってやる必要がある。したがって、そこにどんな種類の絵本をどんな順序で選んだらよいかという問題が生じてくる。

最近絵本の内容も多様化が進んで、その種類を分けることも容易でないが、主なものとしては、創作物語絵本、伝承（民話）・昔話絵本、科学・知識絵本をあげることができる。このうち、はじめの創作物語絵本の中には、ファンタジー絵本、ナンセンス絵本、生活経験絵本、冒険絵本、乗物絵本、動物絵本などがふくまれる。これらが年間、何千冊も出版されているのが実状である。この中には日本で創作されたものばかりでなく、外国の絵本の翻訳もかなりたくさんふくまれている。

こうした絵本の分類に関して、上野 瞭（1972）は児童文学一般について、その内容を子どもの日常的世界（「あたりまえの世界」）を描いたもの、日常的世界の向こうに（あるいは日常的世界のそのなかに）あるもう一つの世界（「ふしぎな世界」）を作りだし、その別世界を描いたもの、日常的世界を裏がえしにして（そこで通用する既成の価値観をぶちこわして）作りだした世界（「おかしい世界」）を描いたもの、の3つに分類し、そこに人間のあり方や人間の可能性を探るはたらきを認めている¹⁸⁾。これを絵本にあてはめると、「ふしぎな世界」はファンタジー絵本に、「おかしい世界」はナンセンス絵本に対応していると考えられる。

さらに上野 瞭（1972）は「古典的名作だけを子どもの本と考える大人は、そう考えることによって、過去の枠組みのなかでつくられた子ども像に、現代の子どもを押し込んでいないか。時代や状況の変化は、大人だけが感得できる何かであり、子どもは不変だと錯覚してはいないか。・・・子どもは大人同様に時代の子どものものである。・・・」として、子どもの「しつけ」を中心とした本について疑問を述べている¹⁹⁾。

確かに、絵本の中に描かれている主人公は「いい子」である場合が多い。これは作者の「いい子になってほしい」という願いが反映されているからだと考えられるが、現実にはいたずらをしたり、いさかいをしたり、失敗をしたりしている子どもたちに、「いい子」の像をただ示すだけでは、子どもたちが主人公に親しみを感じたりたりするのが難しい。もっと、現実の多様な子どもの姿を描くものがあってもいいのではないだろうか。

ところで、どんな種類の絵本を読んだらいいのか、について考える場合、比較的長い期間の問題として考えてみると、あまり特定の種類ばかりに偏らないほうがいいと考えられる。ある一時期に特定の種類の絵本に集中するということはとくに問題ではないが、それが長期間にわたる場合には、子どもの人格の広い側面の発達を考えた場合には問題になる。これはとくに発達の初期にある子どもたちにとっては重要なことである。また、これは子どもの好みの偏りの

問題としてばかりでなく、絵本選びに関わる親や教師の好みの偏りの問題としても留意しなければならないことである。

4. 絵本選びの実際的问题

(1) 絵本に関する情報入手の方法と留意点

絵本を選ぼうとする場合には、まずどんな絵本が出版されているのか、についての情報が必要となる。もしもすでに定評のある絵本の中から選ぶのであれば、多くの研究書や啓蒙書を参考にすることができる。一般にそこではどんな絵本が良い絵本であるか、その条件を備えた特定の絵本の内容と具体的な特徴を示しながら、著者自身の考え方が述べられている。そこで取り上げられている絵本には専門家の間でかなり共通しているものも多い。また、全国学校図書館協議会絵本委員会編『よい絵本 全国学校図書館協議会選定第21回』²⁰⁾のように、関係機関から推薦された絵本を紹介したのもも参考になる。絵本を読み語る初期の段階では、一般にこうした定評のある絵本から取り上げるのが適当だと考えられている。

これに対して、比較的新しい絵本については、新聞の特集記事やテレビの子ども番組、また、関係雑誌の記事や関係出版社のニュースなどから情報を得ることができる。この中には現在よく話題になっている絵本が取り上げられている。

近頃は図書館や大型書店で、子どものための絵本コーナーを設けて、その場で本をゆっくりと読みながら、適当な本を探すことができるようになっていいる所も増えている。これにはじかに絵本に接して、その内容を検討して、取り上げるかどうかの判断をすることができるという利点があるが、その場合でもかなりの数の絵本の中から最も適切なものを選ぶのは容易なことではない。この方法はうまくいけば、たまたま気に入ったものを発見したりする可能性があるが、あらかじめいくつかの候補となる絵本を考えておいて、それぞれについて比較・検討するという方法をとるほうが良い絵本を見つける確実性が高いと考えられる。

こうした候補となる絵本については、上記の情報源だけでなく、身近な知人からの情報や、最近インターネットによる情報なども参考になる。しかし、これらの情報は体系化されたものとはいえないから、自分自身の読書経験と同様、その選択が偏りやすいという弱点があるから、これだけに頼るのは問題であろう。これについて、近頃の地域の図書館では、絵本の読み語り（あるいは読み聞かせ）の会を開催することも多くなっているが、その機会ばかりでなく、ふだんでも専門の職員に絵本選びについて相談をすることができるし、それによって必要な情報を得ることができるはずである。

なお、こうした直接的な方法で絵本を探す場合に考えなければならない他の問題は、そうした絵本選びにおいて、子ども自身をどのように参加させるのがいいかということである。最終的には、子どもの興味を惹かないような絵本を選ぶわけにはいかないから、それならば、はじめから子どもの選択に任せたい、と考えることもできるが、それはあまりにも短絡的であ

る。子どもの発達という観点からみれば、まだ興味そのものの発達についても課題を持っている子ども自身に絵本選びを全面的に任せてしまうのは問題であろう。あらかじめ何冊か、複数の絵本を選んでおいて、その中から子どもに選ばせるという段階的な方法をとるほうが適切ではないかと考えられる。

(2) 幼稚園における絵本選びの留意点

絵本の指導に力を入れているM幼稚園の教師の感想として、「・・・人によって同じ絵本でも感じ方がずいぶん異なることを実感した。教師の嗜好だけに偏らないで、いろいろなジャンルや内容の絵本を用意することの大切さを感じた。」という記述がみられるが²¹⁾、この言葉は子どもの人格の広い側面にわたる偏らない発達を意図する教師の立場を最もよく表していると言ってもいいだろう。

この幼稚園では教師が目的に応じて絵本を適切に選ぶことができるようになるために、約2年をかけてその幼稚園が所蔵する1000冊をはるかに超える絵本を、すべての教師が読んで感想を述べ合いながら、それぞれの絵本について、主に登場するもの、主題、季節・行事、あらすじなどをまとめている。そのことによって、教師たちは次のことに気づくようになっていく²³⁾。

- ・多数の絵本の中で、自分の知っている絵本、今までに子どもたちに読み聞かせていたことのある絵本は、数少なく限られていた。また、知らなかった本にも良い本が多数あるということに気が付いた。
- ・子ども達に読み聞かせるために選んでいた本は、題名や表紙の絵などから自分の好みで選ぶ傾向にあり、片寄っていることに気が付いた。
- ・分析していくと、同じ絵本でも感じ方や捉え方が、読む人によって、大きく違っていることに気付いた。他の人の意見や感じ方を知る良い機会になった。

また、こうした研究的な作業に実際に参加した教師たちの感想をとおして、教師たちがさらに絵本への興味を強め、絵本選びの幅を広げ、自信を持って子どもたちに読み語ることができ、よりいっそう子どもたちへの指導に意欲を燃やしている様子が伝わってくる²⁴⁾。

ところで、一般に幼稚園では集団的な場面で絵本を読み語るから、とくにそうした場面に適した絵本を選ぶ必要がある。このことについて、松岡享子(1987)はそうした集団に対する読み語りに適した絵本の条件をあげているが、それを要約して示すと次のようになる²²⁾。

①ある程度の大きさがあること

個別的な場面ではよくても、あまり小さいものは集団では適さない。

②絵がよく見えること

単純な、力強い線で、くっきりと描かれていて、遠目がきくものがよい。こうした絵であれば、本が小さくても使える。あまり細かく書きこんだものは適さない。

③文の量が多すぎないこと

一場面に対する文の量はなるべく少なく、話についていく子どもの心の動きと、場面

の変化のペースが、ちょうど合うことがのぞましい。

④物語の進展にそった場面割りになっていること

物語の進展にとって、あまり重要でないことが何場面にもわたって描かれていたり、反対に、大事なことがらが、いくつも一場面に押しこまれていないことがのぞましい。

⑤見開きに一場面であること

このほうが絵を見せて読むのに好都合である。見開きに二場面以上のものは集団には使えないというわけではないが、その場合は読みながら、その場面をかるく指でさすようにしたほうがいい。

これらは絵本の外面的な性質についての条件であるが、このうち、上記③に示された文の量については、少なければ少ないほど良いというわけではない。確かに読み語りの初期から長い文の絵本を取り上げるのは適当でないが、あまり短い文の絵本ではかえって物足りなく感じさせてしまう場合もあるからである。これには年齢段階の違いも関係してくるし、それまでの絵本体験なども関係してくると考えられる。

また、絵本の内容面からもいくつかの条件をあげることができる。上述したM幼稚園における研究では、目的に応じて絵本を選ぶ場合に教師個人が留意すべき点が指摘されている。これらを要約すると、教師はいろいろな種類のたくさんの絵本を知っていて、その内容についてもよく理解をしている必要があり、その読み取り方にも多様性があるということを知っていなければならない、ということになる。

幼稚園で教師が子どもたちに絵本を読み語るのはどんな時か、ということも絵本選びに影響してくる。これについて、筆者ら（2003b）の幼稚園教師を対象にした調査では²⁵⁾、「降園前」という回答が断然多く、次いで「活動、保育の導入」、「活動の切り替えをする時」、「落ち着いた時間を過ごそうとする時」、「朝の集まり、一斉保育の時」などがあげられている。ここからは1日の保育が終わった段階で、これから落ち着いた気持ちで帰宅させたいという教師の意図を強く感ずる。このほかには、保育活動の区切りになるような時間の合間で、とくに子どもたちに落ち着きがなく、子どもたちの気持ちがバラバラに感じられる時に、これから何かに集中して取り組ませたいと考えて、まず絵本を読み語っている様子がうかがわれる。これらは主に子どもたちの感情の安定を図るのが目的だと考えられる。

しかし、もっと子どもの人格発達の積極的側面を意図した場合には、あらかじめ計画された保育活動そのものの中に絵本の読み語りを組み込むようなことが考えられてもいいのではないだろうか。その場合には、選ばれる絵本の範囲が広がって、その種類も内容も多様なものになると考えられる。

なお、幼稚園で取り上げる絵本を考える場合に、子どもたちが家庭においてどんな絵本を読んでもらっているかについての実態を知ることが必要である。しかしこれについて、先の筆者ら（2003b）の調査からは、幼稚園の教師たちは案外、家庭での実態を知ろうとしてい

ないことがわかった²⁶⁾。子どもたちにとって同じ絵本に接することは、もしもその絵本が気に入っているものであれば、好ましい影響が期待されるが、そうでない場合には、あまり興味を示さないという結果になるおそれがある。したがって、子どもの絵本に対する興味を強く刺激するためには、これまで子どもたちが知らなかった新しい絵本を選ぶ努力をしなければならない。家庭での実態を知るのはそのための重要な手段であると考えられる。

5. 総合的考察

これまでに検討してきたことをまとめてみると、およそ次のようになる。

まず、良い絵本を選ぶ基準を考えるために、「良い絵本」の概念について検討したが、専門家の間には「はっきりしたテーマにそって、選びぬかれた言葉と芸術的にすぐれた絵を持っていて、しかもそれが子どもたちに親しみを感じさせ、子どもの心を広げてくれるもの」という共通した見方があるように見える。これに対して、子どもの絵本に対する興味は、「意外性」や「躍動性」のように少し違った特徴を示している。また、子どもは人格の知的、感情的、意欲的、社会的な側面に広くわたって興味を示すことが示唆された。これについて、幼稚園教師や保護者には子どもの興味にそって絵本を選ぶようとする傾向がみられ、かつての「しつけ」中心の教育観からはかなり変わってきているという印象を受ける。

次に、絵本選びに影響する要因は種々多様に考えられるため、ここでは、いつでも、誰にでも通用する絵本選びの基準を求めるのではなく、個々の場面で留意すべき基本的な観点を提案しようとした。そうした要因の主なものについてみると、まず絵本を構成する主要な要素である絵と文については、それぞれ好ましい特徴として、およそ一般に共通する観点が浮かんできたが、他方で絵と文との関係を同時に考えて、それらの調和を強調する意見もみられた。

子どもの発達目標に関する要因としては、絵本を読み語る目的の違いによって選ばれる絵本が違ってくる可能性があるが、とくに発達段階の初期においては人格の広い側面に関わる絵本を選ぶか、あるいは特定の種類の絵本に偏らないように、いろいろな種類の絵本を交互に選ぶのが適当だと考えられる。そして、絵本を読み語ることの効果は子どもの生活を豊かにし、親子の絆ばかりでなく人間関係の強化をもたらすことが期待できると考えられる。

子ども自身に関する要因については、絵本に対する興味の個人差が大きいことが明らかなので、絵本を選ぶ際には個々の子どもの興味をどのように配慮するかが問題になる。また、絵本の好みには年齢による違いが指摘されているが、同じ絵本に対して多様な受け取り方を許容する最近の傾向からは、そのことにはあまりこだわらないほうが良いと考えられている。それよりも、社会の変化にともなう子どもの生活の変化にもっと目を向けるべきだと考えられる。このほか読み語りの実践に関する要因として、どんな種類の絵本を、どんな順序で読んだらいいのか、という問題がある。

最後に、絵本を選ぶ際の実践的な問題として、絵本に関する情報をどのように入手するかと

いうことを取り上げたが、これには定評のある絵本のほか、比較的新しく出版された絵本についての情報を得る方法がいくつも考えられ、適切な絵本を選ぶための努力の余地のあることがわかった。しかし、ここでの最も重要な問題は、絵本選びに子どもをどのように参加させるかということである。

また、ここでは幼稚園での絵本選びにとって必要なこととして、教師が絵本についての豊かな知識を持つこと、計画的な指導の中で考えること、家庭における絵本に関する実態を知っていることを指摘したが、これらはいずれも今後の重要な課題になると考えられる。

以上、ここでの研究を概観してきて、絵本を選ぶ場合に欠かせない最も重要な観点は、「子どもをどのように理解しているか」ということである。そこで、このことについて以下に少し詳しく考察することにしたい。

これについて、多くの専門家が推薦する絵本に対して、子どもたちはかならずしも積極的な興味を示していない、ということは何を意味しているのだろうか。これまで絵本の読み語りをおとして、一般の大人が子どもに対して求めてきたものは、「しつけ」を中心としたことが多かったのではないかという批判がある。だから、子どもを型にはめるのではなく、もっと自由にさせるものが必要だという意見である。しかし、こうした意見はほとんど教師や保護者に向けられたものであって、専門家はその対象にはなっていないように見受けられる。専門家たちに共通しているのは、子どもの豊かな想像力を伸ばすことをもっとも重視しているからである。

したがって、子どもが専門家と違った特徴を持つ絵本を選ぶ理由は他に求める必要がある。そこで注目されるのは、近頃の子どもたちが日本の伝承物語絵本にあまり興味を示さなくなったという指摘である。ここでは、そうした絵本の中の日常場面が現在の子どもたちの日常生活とあまりにかけ離れているからではないかと解釈されている。これと似て、現在の大人の子ども時代の生活から、時代の急速な変化にともなって、現在の子どもの生活も大きく変わってきた中で、多くの専門家が推薦する名作といわれる絵本の持つ特徴である「落ち着いた雰囲気」が、現在の慌しい雰囲気の中で生活する子どもたちには遠く離れて感じられているのかもしれない。

このように子どもについての理解によりいっそう努めながらながら、絵本選びにおける子どもの参加についても考えることが必要である。絵本を読み語る場合に、肝心の子どもが興味を示さないようなものは適当ではないが、そうかといって絵本選びをまったく子どもに任せてしまうのも問題である。絵本に対する興味の持ち方については、すでに幼児期において大きな個人差のあることがわかっているから、どの絵本に対してもあまり興味を示さない子どもや、その興味が気まぐれであったり、偏っている子どもの場合には、その興味の持ち方そのものについて指導の必要があるからである。前者については、子どもの日常生活における行動からみて、興味を惹きそうな絵本を選ぶことが必要であるし、後者については、種類の違ういろいろな絵本を用意しておくことが必要である。

いずれにしても、子どもからの要求にそのまま従うのではなく、子どもの人格の全面にわたる好ましい発達を考えながら、あらかじめ用意したいくつかの適切な絵本の中から子どもに選ばせるという方法が、もっとも子どもの現実に合った方法ではないかと考えられる。

引用文献

- 1) L・H・スミス(石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男 共訳), 児童文学論, 岩波書店, p.232 (1953)
- 2) 松居 直, 絵本とは何か, 日本エディタースクール出版部, p.91 (1973)
- 3) 渡辺茂男, 絵本の与え方, 日本エディタースクール出版部, pp.84-93 (1978)
- 4) 瀬田貞二, 絵本論, 福音館書店, pp.48-49 (1985)
- 5) 松岡享子, えほんのせかい こどものせかい, 日本エディタースクール出版部, pp.46-47 (1987)
- 6) 中村 証子, 絵本はともだち, 福音館書店, p.288 (1997)
- 7) 長瀬 荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 幼稚園における絵本の読み語りの実態, 神戸女子短期大学論叢, 48, pp.124-125, 127-128 (2003b)
- 8) 長瀬 荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 家庭における絵本の読み語りの実態, 神戸女子短期大学論叢, 48, pp.142-144 (2003c)
- 9) 長瀬 荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 幼稚園における絵本の読み語りに関する研究(1), 神戸女子短期大学論叢, 48, pp.12-13 (2003a)
- 10) 伊藤 朋子, 絵が物語る絵本, 現代絵本研究(日本児童文学 別冊), 小峰書店, pp.118-125 (1977)
- 11) L・H・スミス(石井桃子・瀬田貞二・渡辺茂男 共訳), 前掲書, p.212 (1953)
- 12) 鳥越 信(編), はじめて学ぶ 日本の絵本史Ⅲ, p.299 (2002)
- 13) 鳥越 信(編), 前掲書, p.300 (2002)
- 14) 長瀬 荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, p.14 (2003a)
- 15) 大橋 和子, 子どもの発達段階と絵本, 現代絵本研究(日本児童文学 別冊), 小峰書店, p.248 (1977)
- 16) 長瀬 荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.14-15, (2003a)
- 17) 三宅 興子, 日本における子ども絵本成立史, ミネルヴァ書房, pp.294-295 (1997)
- 18) 上野 瞭, 現代の児童文学, 中央公論社(新書), pp.208-209 (1972)
- 19) 上野 瞭, 前掲書, p.52 (1972)
- 20) 全国学校図書館協議会絵本委員会(編), よい絵本 全国学校図書館協議会選定第21回, 全国学校図書館協議会 (2001)
- 21) 松秀幼稚園(兵庫県), 絵本とのかかわりⅠ, 研究紀要(平成10年度), p.22 (1999)
- 22) 松岡享子, 前掲書, pp.103-111 (1987)
- 23) 松秀幼稚園(兵庫県), 絵本とのかかわりⅡ, 研究紀要(平成11年度), p.86 (2000)
- 24) 松秀幼稚園(兵庫県), 絵本とのかかわりⅢ, 研究紀要(平成12年度), pp.82-83 (2001)
- 25) 長瀬 荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, pp.126-128, (2003b)
- 26) 長瀬 荘一・幸本由紀子・富本佳郎, 前掲書, p.127 (2003b)